

国内研修報告書

2016年8月25日~30日の5泊6日、島根県隠岐諸島島前地区に訪れました。昨年この島前合宿に参加しましたが、島根県に行ったことも、ましてや離島に行ったこともなかった私にとって「島」という環境と、自分の生活していた環境との違いに衝撃を受けたのを今でも鮮明に覚えています。自分が当時感じた刺激や学びを、少しでも同じように誰かに体験してもらいたいという思いで、今年は運営側として参加しました。今年で3回目となるこの合宿は、2年生7名、1年生7名の計14名で行いました。参加者全員、島根県隠岐諸島島前地区とは縁もゆかりもないメンバーでしたので、合宿を行う前に、島前地域のことについての事前学習を行い、合宿に臨みました。

この5泊6日間では、企画を運営していく中で、地域の方々のいろいろな人に対する「温かさ」を常に感じながら、無事企画を終えることが出来ました。

西ノ島町に着いて二日目、西ノ島中学校で出前授業を行いました。昨年も行い、中学生・担当の先生から好評をいただいたので、また今年もこうして実現する事出来ました。このように、昨年のつながりがあった今年も行えることをとても嬉しく感じました。今回の交流授業では、中学生1~2名と大学生1名でグループになり、大学生の生き方を学び中学生自身の生き方を振り返ることを狙いとしたグループワークを行いました。事前に担当の先生から、幼いころから「島」という狭い環境の中で育ってきた子供たちに特徴的な、「相手に伝えなくてもわかる」という考えを改め、中学生からなるべく質問させるようにしてほしいと言われていたので、実際に試みたのですが、私が担当した中学生はどちらも人見知りだったそうでなかなか質問が来ず、質問するよう促すのに苦労しました。一人の男子生徒は、消防士という明確な夢が決まっていたましたが、もう一人の女子生徒は将来夢もやりたい事もないし、自分が何をやりたいかわからないと言っていました。自分自身、昔から明確な夢は決まっておらず、何かを選択する際には自分が「やりたい」と感じた事を選択してきたので、そのことを伝えながら、そのやりたい事を見つける為にも、いろいろな事に挑戦することも伝えました。

終わった後、控室にて西ノ島中学校の校長先生と担当の先生からお言葉をいただきましたが、その中で、「島の子供たちは島の財産。もっと島内、島外問わず、様々な人たちと交流をもたせて、たくさんの刺激を与えてあげたい。」という言葉がとても印象に残っています。将来を担う子供たちを囲む先生方が、このような考えで教育を行われているからこそ、東京というよそから来た私たち大学生を受け入れてくださったのだと改めて思いました。私たち大学生にとっても自分たちの価値観やこれまでの自分を振り返る、良いきっかけとなりましたが、それ以上に、中学生にとって今回の交流が少しでも自分を顧みる刺激にな

ってくれればよいなと思いました。

その日の午後には、西ノ島町で畜産業を営んでいる道前さんにお話を伺うことが出来ました。道前さんは畜産業だけでなくレンタカー業や、ガソリンスタンドなど様々な事業をやっている方で、今回、運営メンバーの中に道前さんと知り合いがいた為、快く受け入れて下さいました。隠岐の畜産業について、子牛の相場や、放牧のことなどお話ししていただき、更には牛舎の見学もさせていただきました。ただ、こちらの完全な知識不足で、道前さんに質問する際に、畜産業についての基本的なことばかり聞いてしまい、踏み込んだ質問が出来なかったのが今回の反省でした。

また、西ノ島町の役場にある地域振興課の観光商工係、農林水産係、定住促進係の係長の方々からお話を伺う事が出来ました。役場の方々から資料を基に西ノ島について話していただき、それを受けて学生が質問する形式をとりましたが、質問も活発に飛び交い、各自が質問したかった項目を質問することが出来ました。お話を伺う中で、印象に残ったのは、若者がUターンするためにどういった取り組みをしているかという質問に対し、「ふと帰ろうかなと思ったときに帰れるように、“いつでも帰っておいで”というスタンスで、若者がUターンするために必要な仕事・住まいを整えている」、という言葉でした。その言葉の通りで、西ノ島町ではUターン、そしてIターン者向けの様々な取り組みが成されていることがわかりました。例えば、西ノ島町にある空き家を有効活用して、住居希望者に公開する空き家バンクや、高齢化が深刻な漁業で、Iターン希望者に初期投資の援助や、漁費の援助を行っています。また、子育ての面では、西ノ島町の保育園の保育料を2人目は半額、3人目は無料という制度を設けているそうです。

今年初の試みでしたので、ゼロからのスタートで企画がうまく進まない時期もあり、不安要素が多かったのですが、このように無事に終わる事が出来て企画担当者として個人的にほっとしています。今回、西ノ島町の役場の方々にお話を伺いましたが、西ノ島町・知夫・海士町の3島の役場の方々にお話を聞く機会がいつか設けられればなと思いました。

また、地域で行われる行事の参加を目的に、昨年同様、キンニャモニャ祭りにも参加しました。キンニャモニャ祭りとは、毎年夏に海士町で、海士町の民謡「キンニャモニャ」を踊る、町最大イベントです。小道具のしゃもじを持って長い列を作りながら踊るのですが、3島の小・中学生や島前高校の生徒、社会福祉協議会の方々、地域で活躍するNPO団体、さらには東京に暮らす島前が好きな人たちが集う団体など、地元や島外からたくさんの方が集結して、踊り手となっていました。私たちも飛び入り参加枠で、ぎこちないながらも1時間、皆さんに交じって楽しく踊らせて頂きました。キンニャモニャの踊りが終わった後、小道具で使ったしゃもじ、運営の方に返しに行ったところ、「よそ（島外）から来たならそれ、あげるよ」と温かく全員分のしゃもじを下さいました。また、お祭りの最中で、昨年島前高校ヒトツナギ部との交流で知り合った高校生と再会し、キンニャモニャ祭りの案内をしてくれたり、島での最近の生活を聞くことが出来ました。さまざまな屋台や、行列を成すキンニャモニャ踊り、そして東京の某花火大会にも負けず劣らずの豪華な花火

が打ちあがるなど、お祭りとしても非常に楽しいお祭りでした。そして何より、島の人たち、島の外からきた人たち、みんなから愛されているお祭りなんだということが肌で感じとれた一日となりました。

また、29日の昼に西ノ島を出て、本土に帰る予定でしたが、台風の影響で島と本土を繋ぐフェリーが終日欠航となり、延泊するハプニングが起きました。そんな私たちを不憫に思った地域の方が、夜自宅に呼んでくださり、ご馳走してくださいました。更に、お食事に島で活イカ漁業を営んでいる方もきて下さり、たくさんお話させて頂きました。最後の最後まで地域の方はあたたかくして下さいました。本当に感謝の気持ちで一杯です。

今回、こうして無事今年の島前合宿は行えましたが、来年も島前合宿が行われるかは正直わかりません。ですが、この3回の中で確実に島前と法政大学・島前合宿のつながりは広がっていると感じました。せっかく出来たこのつながりを、活動の形や姿は変わりながらも継続していきたいと思いました。そして、更につながりを広げていければいいなと思います。

振り返ってみると、去年の夏、冬、そして今年の夏、というように私は半年に一回島前に訪れています。そのたびに、毎回違った刺激をくれる島前が、私は好きなのだと思いました。毎日ただ学校に通っていると、日常生活にのまれて、意識が薄らいでしまうことにふと恐怖感を感じることもあります。東京と島根の距離はとても離れていて、頻繁に行ける距離ではないので、なかなか行けませんが、日々の生活の中でこの合宿で考えたことを忘れずに、自分のものにしながら、更に精進していきたいと思っています。そして、最後になりますが、今回この島前合宿を企画・運営するにあたって、運営メンバー、参加者のみんな、先輩、地域の方々など、本当にたくさんの方の協力があってこそこの企画は行えていることを実感しました。本当に、ありがとうございました。